

今年度からチームで研究をすることになったのを受け、最近の「チームの動き」を紹介するコーナーを作りました。初回の今日は、各チームが業務内容（目標）と最近の出来事をご紹介します。

より効果的なオニオコゼ放流を！

地付き魚資源増殖チーム

地付き魚のうちオニオコゼの資源増大のため、最も効果の高い種苗放流技術の開発研究に向けた事前研究に取り組んでいます。その中で、従来不明だったオニオコゼ稚魚の野外分布や食性等の生態、および人工生産稚魚（放流種苗）の特性（沈降速度、隠蔽性、外敵への防御能等）を明らかにしようとしています。また、稚魚をトレーニングすることで、潜砂能力などの種苗性を向上させる試験や放流時の標識法についても検討しています。



10月には、標識したオニオコゼ稚魚を実際に野外放流して追跡調査しており、今後はこの結果から抽出された問題点（放流後の減耗原因）の解決に向けた技術確立を目指したいと思えます。

新しい広島ブランド創造に向けて！

フランスかき類養殖研究チーム

本チームは、フランスがき類を利用した広島かきの新商品開発及びブランド化への可能性を検討するため、次の研究を行っています。

- 商品特性の把握：天然個体の調査から成長や身入り特性を把握し、市場のコケゴロモに対する評価からブランド化の可能性を検討する。
- 種苗生産：コケゴロモ幼生の産仔・成長や付着などの発育生態に関する知見を得た上で、当センターが保持するマガキ生産技術と施設を応用してコケゴロモガキの初期養殖方法について検討する。

年度前半には、全国で初めて人工種苗生産に成功。コケゴロモ稚貝を7万個生産することができました。



採集した天然のコケゴロモのむき身と殻

キジハタ・カサゴの放流を目指して

地付き魚生産チーム

本チームでは、キジハタ及びカサゴの種苗生産技術開発に取り組んでいます。これらの魚種は漁業者からの放流要望が強いだけでなく、キジハタについては単価が高く、成長が良いことから次世代の養殖対象魚としても期待されています。しかしながら、安定的な種苗生産技術は確立されていないことから、当チームでは適正な餌料や飼育環境を検討することで、生残率の向上はもとより、健苗性の高い種苗を生産する技術をめざしています。



センターで生産したキジハタ種苗(25mm)

環境とのバランスが取れたかき養殖とは？

かき養殖適正化研究チーム

本チームは、かき養殖筏が多い江田島湾を対象として、かき筏から海底への有機物負荷を低減するような養殖手法を開発し、底質環境



←かき筏から落下するかきや糞の量の調査

→湾内のかき筏数とそれぞれのかき養殖経過年数のチェック



の悪化を防ぐ手だてを考案する研究を行なっています。今年度は3年間の研究期間の1年目で、これまでに関係漁協の協力によって、かき筏から落下するかきや糞の量の調査や湾内のかき筏の総数と経過年数の調査を行ないました。関係者の皆様には、引き続き協力いただきますようよろしくお願いいたします。

魚類疾病・赤潮とも大きな被害なく

危機管理チーム

危機管理チームでは、海面や内水面で起こる魚病などの疾病対応（魚病診断・指導）と、海面で発生する渦鞭毛藻等による有害・有毒プランクトンのモニタリング調査（漁場監視）を行っています。

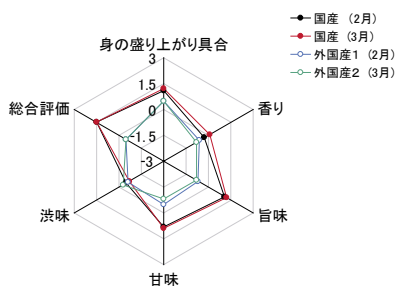
- 魚病の発生については、マダイイリドウイルス病の発生が例年より多く確認されました。KHV病の発生は、養殖場や河川において5件確認されましたが、感染の拡大は確認されませんでした。
- 有害赤潮プランクトンの発生状況については、東部海域において7月にシャットネラ赤潮が発生しましたが、大きな被害は見られませんでした。

実用的な新養殖法を現場に定着させよう！

一粒かき養殖研究チーム

本チームは、広島かきブランド化を支援するために、一粒かき養殖で問題となっている養殖初期の成育不良や大量へい死を防止する安定生産技術の研究を行っています。また、かきの味覚成分に関する分析を行い、産地や養殖海域による特性の解明に取り組んでいます。

本研究は3年間の計画で、2年目の今年は様々な養殖密度での比較試験や養殖現場での実地試験を行っており、また、味覚成分についても漁場の餌環境との関連についての調査に取り組んでいく予定です。



2006年食味試験結果



様々な収容密度での稚貝の成長状況を試験しました

かき養殖の基本！採苗を安定させるには？

かき採苗研究チーム

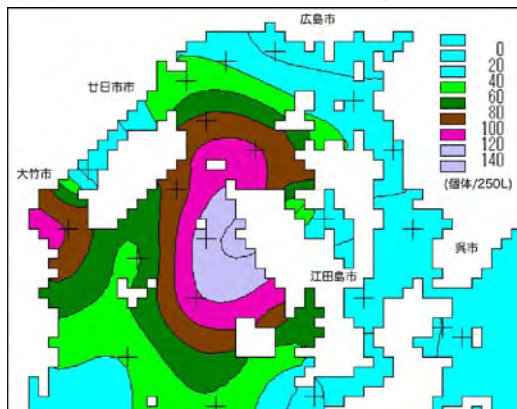


図 広島湾におけるかき大型幼生の分布（平成19年7月12日調査 表層5m）

今年のかき天然採苗は、ほぼ順調に推移しましたが、採苗が難しい状況は変わっていません。当チームでは、ここ3年間かき幼生が出現する時期に広島湾内21定点で幼生調査を実施してきました。その結果、広島湾でのかき幼生の分布や移動状況が徐々にわかってきました。今後、共同研究機関である（独）産業技術研究所中国センターの広島湾海水流動モデルによるかき幼生の移動・拡散シミュレーションの結果や、広島市農林水産振興センターが調査してきた過去の採苗状況等の解析結果などから、広島湾で安定的にかき採苗を行なうためにどうしたらよいか、総合的に検討する予定です。

すいさんとかいよう

トピックス

総合研究所成果発表会

10月25日、広島県立総合研究所の成果発表会が福山市で開催されました。東部工業技術センターが発足して25周年を記念したもので、記念講演としてシャープの中武福社長から、「オンリーワン経営と地域に根ざした取り組みについて」と題して、「亀山モデル」として世界に名をはせる液晶技術や各種技術を融合させた携帯電話開発の考え方について、事例を挙げながら紹介されました。水産海洋技術センターからは、赤繁部長が「広島新ブランドかき生産技術開発の歩み」について報告しました。また、ポスター発表では、「アマモ苗床シート」ほか3課題を掲示しました。



高水温が続きました

今年海水温が平年より高めで推移しました。水技センター地先で行っている水温観測結果によると、6～7月は平年並みで推移した後、お盆過ぎ頃から水温の平年値（過去30年間の同日付での平均水温）を上回る日が続いていました。例年では、水温のピークは8月終わりごろで、それからはだんだんと水温が下がってくるのですが、今年は9月下旬まで上がり続け、最大で平年値を3℃近く上回った日もありました。10月末現在では、平年値との差は1℃前後まで落ち着いてきました。これから気温の低下とともに、水温も平年並みまで低下していくのではないのでしょうか。

当センターのホームページで、水温等の観測結果を見ることができます。詳しくはそちらをご覧ください。

